

書評

John Batchelor, *Lady Trevelyan and the Pre-Raphaelite Brotherhood* (London: Chatto & Windus, 2006)

山口 恵里子

ウィリアム・ベル・スコットが描いたポーリン・トレヴェリアンの肖像画がある。著者ジョン・バッチェラーがいうように、鼻は少し上を向き、髪はきちんとまとめられている。小柄な彼女は、薄茶色の瞳をし、額がかすかに突き出していた。愛する友人たちには輝くような笑顔を見せたという。この女性の名前は、あまり知られていないかもしれない。1879年に彼女の詩を集めた選集が出版されているが、彼女は詩人として名を残したわけでもない。なぜその彼女の伝記が著されたのだろうか。

ひとつには、彼女が親交を結んだ芸術家、作家、学者たちとの日々のやりとりが、ヴィクトリア朝社会と文化の営みをそのまま映しだし、美術界や文学界の動向、科学と宗教の緊張関係、ダーウィンの著作の波紋まで伝えているという点がある。ポーリンは「知り合った人、耳にした本、はじめて見た芸術作品、よく知らない訪問地について、即座にすべてを知りたいと願った」という(xi)。本書にはじつに多くの友人、しかも各界をリードする人びとが登場し、彼らはポーリンを通して新たな側面を見せる。ポーリンとの関係では、彼らは等身大の姿で現れ、率直な言葉を交わすのだ。

ポーリンが夫のウォルターと住んだノーサンバランドのウォリントンには、ロンドンから遠く離れているにもかかわらず、人びとが集い、心を癒す場となった。ポーリンはそうした場を用意するために、邸宅を改築し装飾した。本書は、この装飾をヴィクトリア朝美術史に位置づける試みでもある。友人たちとの親交がポーリンの日常の「前景」を賑わしたとすれば、1852年に始められた装飾は彼女の人生の「背景」だった(127)。本書は、この前景と背景を行き来しつつ、その往来に近代のうごめきを折り込みながら、

ポーリンの像を描き出し、彼女と共にいた人びとの感情にまでふれようとしている。著者が典拠としたのは、(みずからが英文学を講じている) ニューカスル大学が所蔵するトレヴェリアン家の資料や、未出版のポーリンの日記や書簡、彼女を取り巻いた人びとの日記や書簡である。本書ではじめて明らかにされたポーリンの生涯を、断片的だが、たどってみよう。

1816年サフォークの牧師の家に生まれたポーリナ(ポーリン)・ジャーミン・ジャーミンは、17歳の時、准男爵家の跡継ぎであるウォルター・トレヴェリアンと出会う。ウォルターは36歳であった。二年後の1835年二人は結婚する。二人を結びつけたのは、地質学や骨相学に対する共通の関心だった。だが、資産をもたない彼女との結婚は、トレヴェリアン家からは歓迎されなかったようだ。結婚三年後にはじめてウォリントンにウォルターの家族を訪ねた際、彼女は義妹の一人を「太りぎみのヴァンパイア」(23)と記している。

当時、地質学は、創造の起源をめぐる宗教と緊張関係にあった。たとえば、ウォルターのオクスフォードでの師ウィリアム・バックランドは地質学の発見と聖書の記述の接点を論じ、友人のチャールズ・ライエルは両者の接点を認めなかった。ウォルターとポーリンは、こうした議論を耳にし、ダーウィンの『種の起源』(1859)をめぐる学界のショックを間近で経験している。また、ポーリンは、宗教的な危機感も肌身で感じとっていた。オクスフォード運動が高まりをみせた1840年代初め、彼女はニューマンの説教を聞き、ほどなくピュージー主義者になる。著者によれば、ピュージー主義への同調はオクスフォードの権威への反抗を、地質学への関心は教会の権威に対する挑戦を、そして後にみるラスキンとの親交はロイヤル・アカデミーの権威への抵抗を意味した(47)。ただポーリンはやみくもに古い価値観に背いたわけではない。これまでの思想的、精神的な礎が急速に形を変えていく時代、ポーリンとウォルターは、友人たちとの交流のなかでみずからの立ち位置を模索する。夫妻は、友人の医師ヘンリー・アクランドが計画した、科学を教授するためのオクスフォード博物館建設に資金を提供している。この援助は、他の人びとにこのプロジェクトへの参加、すなわち科学へと一歩接近することを促したものだ。

ポーリンが「知的な交歓」をたのしんだ人物がジョン・ラスキンだった。

ポーリンは1843年ラスキンに出会うと、彼から絵の手ほどきを受け、「直観力にすぐれた」水彩画家となる。一方ラスキンもポーリンから、ストイシズム、義務感、責任感、管理能力、そして女性を知的に同等な存在として認める必要性を学んだという。ラスキンは自著に対するポーリンの批評に耳を傾け、自分の発見を彼女と共有することを望み、きわめて個人的な心情を彼女に吐露した。

ラスキンがエフィと離婚したときも、ポーリンは彼の味方に立った。離婚に至る前の1853年6月ラスキン夫妻とジョン・エヴァリット・ミレイ、ミレイの兄は、スコットランドに向かう途中ウォリントンを訪れる。ポーリンの日記は、このときすでに恋愛関係にあったエフィとミレイが緊張状態に置かれていたことを伺わせる—「ジョン・ミレイはラスキンの魅力的な肖像画を描いてくれた。よく似ていて完璧に描かれている。エフィはひどい頭痛で気分が悪く、ベッドに横たわっていた。」(84)ラスキンはベル・スコットらとも衝突したが、ポーリンは彼の最良の部分の常に見ようとしていたという。ポーリンは親のような心で書簡を送り、ラスキンの意固地さをたしなめたりもしている。

ラスキンとの件でミレイとは距離が生じたが、ポーリンは他のラファエル前派のメンバーとも親交があった。オクスフォードではロセッティがモリス、バーン=ジョウンズらと行っていたユニオンの壁画装飾(1857)を見に行き、ロンドンではトマス・ウルナーとともにF. M. ブラウンとロセッティ、ブラウニングを訪ねた。ロセッティのスタジオでは水彩画《ダンテの夢》を見て、細部にわたるノートをつけている。ロセッティは制作中の作品を人に見せなかったのだが、ポーリンには作品をゆっくり見せていたのだ。

なかでもポーリンが近しくなったのはウルナーである。ウルナーについて書かれたものが入手困難であるなか、本書でウルナーに充てられた章は貴重である。ウルナーは自分にとって重要な人を見分け、有名人と知り合うことを望むなど利己的な面があった一方で、男も女も多くの人々を惹きつけたという。ポーリンは彫刻を注文したが、成功を目論むウルナーは当時の偉人の胸像を制作することを優先してしまう。それでもポーリンは、彫刻の完成を待った。

このようなウルナーのパーソナリティにまで踏み込んだ章も、そしてス

ウィンバーンについての章も、章自体が彼らの伝記となっており、ポーリンはむしろ後景に退いている。けれども、これらの章を導いているのは、彼女の彼らに対する母親のようなまなざしだ。とりわけ、子供がいなかったポーリンは、幼い頃から知るスウィンバーンを母のように庇護した。1865年、彼のふるまいを心配したポーリンはこう書き送っている。「あなたの手紙は私をととても慰めてくれます。あなたに帰せられている話をすべてあなたが怒って否定したと聞いて嬉しいです。いまやあなたは人びとがどんな風に物事をとりあげるかわかったでしょう。これからはもっと用心するようになるでしょう。」(218)

このように著者は、彼女をめぐる人びとに焦点をあてた章を挿入し、視線の主体のポジションを移動させながら、複数の伝記のコラージュのなかからポーリンの生を現そうとしている。夫妻がギリシャのコルフ島で出会った統治官の娘ルーにも一章が費やされている。ポーリンは12歳の年齢差があるルーとの友情を深めたが、ルーの気まぐれだがしたたかな生き方は、ポーリンの快活さと思慮深さが織りなす生き方と対照的だった。ルーは、妻を亡くした老齢のアシュバートン卿に近づき妻の座を得るが、未亡人になると、ブラウニングに自分に結婚を申し込ませようと画策する。「家庭の天使」からはほど遠いルーがいる（ポーリンは、パトモアの詩「家庭の天使」を「めめめそしたもので「気にもかけない」と断っている(105)）。他方、貧しい牧師の家に生まれたポーリンは裕福な家に嫁いだが、知性と精神性という視点から人生を見ていたという（149）。ポーリンはまた、サマーセットの村の女性にホニントンレースを制作させ、彼女たちに利益をもたらす事業にも献身的に貢献している。

ポーリンがウルナーの彫刻を置こうとしたのは、ニューカスルの建築家ジョン・ドブソンに改装を依頼したウォリントンの邸宅の中央ホールである。彼女は、ホールの装飾にあたりノーサンバランドの芸術家と職人の手で芸術と建築を結合させ、土地の植物や動物で彩ろうとした。ベル・スコットが担当した壁画の題材は、ノーサンバランド史からとられている。著者は、ウォリントンの装飾が地方の芸術に対する国の態度を変えさせたと述べる。壁画が完成した1861年、W. M. ロセッティはこう評している。「ウォリントンの場合、絵画の地方史というよりふさわしいものはない。それ

は、「国家的」な歴史に基づく芸術と同様に真実で貴重なものであり、また各地方や地域の多様性を認めると同時にそれを要求するものであり、さらに芸術性にあふれた地方の一般の人びとの関心、もっといえば人間の関心に必要な、尽きることのない素材を与えている……。」(200)

ウルナーの《文明》は1866年11月に完成したが、ポーリンはその像を見ることはできなかった。5月11日、夫ウォルター、ラスキンらと旅していたスイスの宿の一室で彼女は息をひきとっていたのだ。死因は卵巣痛だった。じつに20年ものあいだ彼女は、その病とストイックに闘ってきたのだった。1851年にはエジンバラで開腹手術を受けた後、衰弱しながらもスコットランド・アカデミーの展覧会に赴き、展評を書いている。冒頭でポーリンの日常の前景には友人との交流があり、背景にはウォリントンの装飾があったと書いたが、その前景に著者は病身の彼女の姿も見ている。そうしたポーリンの生の風景に彩りと深みを与えたのは、いうまでもなくウォルターとの日々だった。それは、ウォリントン、ロンドン、オクスフォード、エジンバラ、ヨーロッパ各地での友人とのふれあいがもたらす夫妻の豊かな時間に、病の痛みと苦しみ、折り重ねられた日々だった。本書は、彼女が耐えた痛みをむしろ忘れさせない。痛みは、彼らのいる場所の至るところに入り込んでいる。英国では19世紀半ば、痛みは天罰でも救済への手段でもなくなり、自己と対峙させるものとなった。この変化に伴い、痛みに関する記述が増えていくが（L. Bending, *The Representation of Bodily Pain in Late Nineteenth-Century English Culture*, 2000）、ポーリンの日記や書簡には夫やラスキンの病状を心配する記述はあっても、自分の病状について記した箇所はほとんどないという。だから、著者は、友人たちとの親交のなかから彼女の姿を浮かびあがらせたのだが、痛みのなかで彼女がどのように自己を見つめたのか、その内省の記録も読んでみたい。ヴァージニア・ウルフの「病であることについて」(1930)に匹敵するような自己への洞察が見られたかもしれない。このようにおもわせるほど、本書はポーリンのイメージをわたしたちの前に現すことに成功している。そして、そのイメージからヴィクトリア朝文化の襞をひろげていくことにも。

書評

Doborah Cohen,
Household Gods: The British and Their Possessions
 (Yale UP, 2006)

久守 和子

葬儀屋とインテリアとの間に密接な関係がある、などと今日考える者は少ないだろう。だが本歴史書の著者Deborah Cohenによると、19世紀前半イギリスでは、中産階級向けの家具を葬儀業者が製作していた。蒸気動力を用いて木材から柩と家具を効率よく生産し、販売、搬入、引越しに至るまで請け負っていたのだ。さまざまに彫刻された柩が並ぶ葬儀業者の店先で、日々用いる食器戸棚やテーブル、椅子などを客が選んでいたと思うと想像するだけで楽しい。ただしその葬儀業者も、19世紀中頃には生産効率よりも顧客拡大を図るようになり、宣伝文句に「戸棚類」「室内家具」「カーペット」「壁紙」などの文字を大きく書き、限りなく小さな字体で「葬儀業も行う」と付け加えるようになったという。

家具部門はやがて独立し、19世紀後半、ロンドンに中産階級向けの家具小売店が次々出現する。デパートには客が目を見張るようなショールームが設けられ、チッペンデル風のダイニング・テーブルに白地に青い模様の入ったエレガントな食器が並べられ、深紅のベルベット張りの重厚なソファ・セットが置かれた。特にトッテナム・コート通りに家具小売店が集中し、60年代、70年代には高級家具店メープルや、シュルブレッド、ヒールなども出揃う。なかでも中産階級客層の憧れの的となったのがメープルで、本店は家屋25軒分に匹敵する間口、5階建てを誇り、海外にもやがて進出、世界有数の高級家具店として「良質とリスpekタビリティ」の象徴となった。

E. M. フォースターの小説『眺めのいい部屋』（1908年）に、これらの店

の名前が登場するのをここで思い出した。主人公ルーシーは中産階級の娘、中産階級上層のセシルの3度目の求婚をようやく受け入れる。ところがセシルは、婚約したとたん、ルーシーの家の応接間の家具が気になりだす。「トッテナム・コート通りの痕跡」があまりにも生々しい——「この椅子、あのニス塗りの書棚、そしてあのライティング・テーブル。家具店メープルやシュルブレッドのトラックが到着し、搬入していった様子まで眼に浮かんでしまう」のだ（断るまでもなく、貴族や中産階級上層の家庭では由緒ある家具を代々受け継ぐ）。セシルは、この中産階級の安っぽさからルーシーを「救出する」ことを胸に誓う。だが、彼女の母親はこのセシルの思い上がりが許せない。神経に障るのだ。物語では、若い二人の関係の破綻がここで早くも予想される設定となっている。たかが家具、されど家具。イギリスでは、家具が階級差を明確化するステイタス・シンボルであると同時に、個々の思い入れの強い事物であることを雄弁に物語るエピソードといえよう。

さて、Cohenの著書の家具店の歴史に話を戻そう。1930年代に入ると、一世を風靡したメープルのような高級家具店も、家具チェーン店に王座を奪われる。世紀末からエドワード朝にかけて、中産階級の顧客はインテリア・コンサルタントなどにより、室内装飾は自己表現の一つ、個性の現れであると教えられ、その結果行き過ぎと思われるほどエキセントリックな趣向を相互に競い合うことになった。しかしモダニズム到来と共にステール製家具が紹介されると、彼らはこれを拒絶する。無味乾燥で、温かみに欠けると受け止めたのだ。かくして、二つの世界大戦を挟む節約の時代には、だれもが「平均的」で「無難」と推奨される家具や室内装飾を選ぶようになる。中産階級客層を対象とする家具の生産工程、販売方法、装飾コンサルタントによるアドバイスは、本書が扱う1830年代から1930年代までの1世紀間に大きな変貌を遂げるのである。

本書は、もう一つ重要な史実を記録する。19世紀後半、戦闘的フェミニストがインテリアと深く関わったというのである。

イギリスの家庭では、元来、室内装飾は夫の領域とされた。女性の領域だったととかく理解されがちだが、これは誤りである。家具や壁紙、食器の注文にとどまらず、訪れた客に家の中を案内し、改築の模様など自慢す

るのも、一家の主人であったという。(幾つかのイギリス小説に照応してみても、Cohenの見解は正しいように思われる。ジェイン・オースティンの小説『ノーサンガー・アビー』(1817年)では、確かに、ティルニー将軍が広大な屋敷を、現代風に改造した台所に至るまで主人公に自慢げに見せて回るし、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』(1847年)では、新妻を連れ帰ったヒンドリー・アーンショウが屋敷「嵐が丘」の部屋の改装を妻に提案、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』(1871-72年)では、医師リドゲイトが正餐用食器一式や高級家具を購入し、結婚後、借金返済に窮することとなる。)

このような状況を反映するかのように、定期刊行物のインテリア記事は1880年頃まで男性を対象に執筆され、インテリア関係の職場そのものが男性に独占されていた。ところが、19世紀後半、フェミニストたちは参政権を要求するのみならず、家庭内外における女性の活躍の場の拡大を主張、フェミニストの中から女性の室内装飾家第1号も生まれる。1882年、法改正により女性の財産所有権が認められ、さらに住宅が郊外へと移り男性が家庭で過ごす時間が短縮されると、室内装飾は女性の手に渡った。ちなみに、かの有名な過激派フェミニスト、パンクハースト夫人は、インテリア店を次々閉店。自立と運動資金の捻出を図ったが、赤字経営が続いても、1906年、活動を女性参政権運動のみに絞るまで店経営に固執したという。情熱的な雄弁家、窓ガラス破損常習犯、長期ハンガーストライキ決行者、投獄されても凛として怯まない過激派に、どこか繊細な響きを持つインテリア店という組み合わせは、歴史的経緯があるにせよ、粋な組み合わせと言わなければなるまい。

以上、*Household Gods: The British and Their Possessions*を断片的に紹介してきたが、ここで全体を概観しておきたい。本書は7章構成、それに序とエピローグが付されている。目次は以下の通りである。

序 家庭でくつろぐイギリス人

第1章 モノ——道徳心と富裕層

第2章 商業に捧げられた大聖堂——顧客と企業家

第3章 家庭における芸術——家はどのようにして芸術的になったか

第4章 所有すること——男性、女性、そして装飾

第5章 我が家は劇場——個性と所有物

第6章 過去を求めて——信仰としてのアンティーク

第7章 モダン・リビング——「安全第一」の勝利

エピローグ 隣人の家

本書の目的は、イギリス中産階級が室内装飾をどのように理解し、どのように実践してきたか、1830年代から1930年代までのほぼ1世紀を見渡し、論じることにある。著者は、「宗教心」「消費活動」「芸術的センス」などの諸問題をこれに絡ませる。宗教心が一つの重要なキーワードとなっているのは、本書の表題“Household Gods”(家庭に祀られた神々)や、第1章、第2章、第6章の表題や副題に用いられる表現「道徳心」「大聖堂」「信仰」などからも想像できよう。18世紀末、中産階級には福音主義が浸透し、牧師が清貧の徳目を説く一方で、市場には海外からの商品が流入、消費革命が起こる。しかも、ヴィクトリア朝から第二次世界大戦にかけて、未曾有の経済的繁栄が続く。神かマモンか、禁欲か贅沢か。ピューリタン精神を標榜しながらも、イギリス中産階級は物質主義に走る。商品は氾濫し、各家庭にはモノという神々が祀られる。これは一体どうしたことか。著者はこれに答えようとする。

道徳心と消費欲。人々は内的矛盾に戸惑いながらも、両者の間で折り合いをつけていった。つまり、美は聖なり、家庭を美しく飾ることは美しい精神を生む、芸術的センスある家庭こそ道徳的などと新しい解釈を加え、内的葛藤を乗り越えていったのだ。魅力ある商品を次々開発する企業家。美的センスを教えこもうと奮闘する評論家。室内装飾の問題であれば、どのような質問にも応じる新聞・雑誌の相談コーナー。彼らは結集して流行を作り、消費を煽る。所有物は自己の証明となり、我が家は隣人・友人に見せびらかす劇場と化す。その結果、19世紀末、国内人口の4分の1を占める中産階級は、室内家具の最大の消費者となる。しかし、その後、第1次世界大戦中の標語“Safety First”(安全第一、無難を求めよ)を実生活にそのまま取り入れたかのように、過度の自己表現は沈静化され、各家庭のインテリアは均質化されるという結末に落ち着くのである。

ブラウン大学の准教授である著者は、歴史学専攻。イギリス各地のアーカイブ、家具のコレクションなどを掘り起こし、雑誌・新聞記事はもとより、商品取引の記録、未発表の個人の手紙、日記、写真アルバムなど1次資

料を涉猟し、インテリアをめぐる中産階級の日常を炙り出している。筆致は平明、情報量豊かで、多数掲載される図版・写真も美しい。芸術美に偏りすぎるとして、ラスキンの芸術論や、モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動、芸術至上主義などが検証対象から外され、また、ワイルドなど男性の同性愛に対する偏見が散見されるのは残念だが、中産階級の日々の生活に密着し、アンティーク趣味やバザール、蚤の市などにも目配りを利かせ、見事に生活感あふれる記述となっている。丁寧な脚注、参考書目一覧、索引が付されているのも有用である。

書 評

Nancy Armstrong, *How Novels Think: The Limits of Individualism from 1719-1900* (Columbia UP, 2005)

武田 美保子

「小説の歴史と近代的主体の歴史とは、互いに軌を一にしている」、というのが本書の主張である。Nancy Armstrongのこの論は、Ian Wattが*The Rise of the Novel*の中で個人主義と小説の起源をめぐる展開した議論の、Armstrongによる書き換え、もしくは読み直しの作業といえるだろう。その意味でこの問題提起は、「小説の興隆」と個人主義の関係についての古くて新しい、きわめて根源的な問いかけであるといえよう。

17世紀、18世紀における社会的、経済的、宗教的な変化が「近代的個人主義」を産出することになり、それによって新たな文学的語りとしての小説が誕生することになったのだとするWattに対して、Armstrongはむしろ、両者の間の原因と結果を逆転してみせる。というより、そこに相互関係を読み込むことで因果関係を無効にしまうのだ。つまり、当時の作家たちによって、これまでの書き物には存在したことのなかった、ある種の主体の形成が試みられ、一旦それが小説において形成されるや「その主体は作家、読者、他の小説の中で再生産され、ひいては法、医学、道徳・政治哲学、生物学、歴史、そして個人を最も基本的な単位とするその他の書き物の中で、英国文化全般にわたって再生産されていったのだ」という(3)。言い換えれば、ある「過剰なもの」をその内に抱えている個人が、文化的社会的制約の中でいかに十全に自己実現しうるかについて、小説と個人が共に思考を重ねる中で、両者は互いに変化をとげながら相互形成されていったのだというのである。その過程はタイトルが伝えるように、主体を「小説はどのように思考するか」について、自らが産出する主体に教えることでもある。

Armstrongは以上の議論を、LockeやHume、Rousseau、Darwin、Kant、Freudなどの思想家の思想にぶつけながら、またAlthusser、Foucault、Butler、Deleuzeなどの今日の批評家たちの理論を援用しながら展開していく。扱われるのは、Daniel Defoe、Jane Austen、Walter Scott、Mary Shelley、Brontë姉妹、Charles Dickens、George Eliot、Bram Stoker、Rider Haggardなどの作家の小説である。これらの小説の個別の分析の中でArmstrongは、小説がその時代において果す役割を思想家の書き物のそれとほぼ同列に置くことにより、小説が文化形成において果す役割の再評価を試みているのである。果敢な試みというほかはない。

具体的な議論は、まずLouis Althusserのいわゆる「悪い主体」であるDaniel Defoeの*Robinson Crusoe*の分析を皮切りに展開され、この章の副題にあるように、「はずれ者がいかに道徳的な主人公となったか」が探られる。当初は、父親からキリスト教の父なる神に至るまで、さまざまな形の社会的権威に反抗していた小説のヒーローは、「個性を表現する手段である攻撃性を制御し」、社会的秩序を崩壊させかねないその欲望を全体の幸福に服従させることにより、ついには「善良な主体」となる。Defoeのヒーローは、道徳的な抑制によって、制御された過剰なエネルギーを、「集合的な目的」のために活用し、「国家の統治者」となるのだという。

続く第2章では、英国小説が19世紀初頭の読者に、個人主義の過剰性をめぐってどのように再考したかを詳述するために、Scottの*Waverley*と、Shelleyの*Frankenstein*という全く対照的な二つの小説を取りあげる。それも、従来取られてきた各々の批評的アプローチを相互に逆転して、前者を精神分析のレンズを通して、また後者を歴史小説として読むよう提案する。その際の、個のありようと国家のありようという両方の観点から、異質なものを内に取り込んでしまう*Waverley*をカニバリズムと、異質なものを拡散させていく*Frankenstein*を吸血鬼と比喩的に結びつけ、さらには各々をフロイトの「喪(mourning)」と「メランコリー(melancholia)」という二項対立的理論へと結びつけていく。その自在な議論展開はスリリングできえある。こうしてScottは、英国とスコットランドの両国を含みうるような想像上の英国性を考案するために、「英国性をスコットランドの低地に拡張させた」のだとし、一方のShelleyは、人類それ自体の限界を越え、「どのよう

な個人をも表象しうるような超国家的共和国を思い描いた」のだという。また、これら2つの小説のおかげで、1820年代以降の英国小説は、国民国家形成の物語を語ることなくして、主体形成の物語を語ることが出来なくなるのだと指摘する。これら2人の作家はともに、初期の文学的伝統であるロマンスや叙事詩などの形式ではなく、リアリズムの時代に小説という形式を通して表現するという制約の中、感情豊かな個人主義喪失の後、Waltonや*Waverley*という月並みな登場人物に道徳的な重要性を託すことになったのだという。

19世紀ヴィクトリア朝小説のヒロインたちの個性に対して作動する、これまでとは違った態度が提示される第3章は、とりわけArmstrongのフェミニストとしての視点が活きているといえよう。ここでは、最終的には抑制されるものの、個性が限界ぎりぎりまで拡大するのを許された18世紀のヒロインたちとは異なり、*Wuthering Heights*、*Domby and Son*、*The Mill on the Floss*などにおける「過剰性」を内包したヴィクトリア朝小説のヒロインたちは、「かつては自己実現へと導かれた過剰性と、柔軟な社会秩序という幻想が、まったく逆の結果に譲り渡されたことを読者に納得させるために」(79)、男性たちによって厳しく処罰されなくてはならない。悪いヒロインたちを、男性の登場人物のものであれば許されるような特質を備えているがゆえに、「病理化したり、犯罪者扱いをすることにより、彼女たちを殴ったり、溺れさせたり、焼いたり、首吊りの刑に処したり、追放したりすることを正当化する」(80)。それによって、こうした男性の「悪い主体」は、男性に対するのと女性に対するのでは対応が異なっているという男女間の不均等を、読者に詮索させないような機能を果すというのである。かくして、当時女性の中では存在が許されなかった特性を、暴力的に押し込め込んでしまう男性人物が多く登場する「ヴィクトリア朝小説においては、良い男を見つけるのが難しい」のだと、Armstrongは言う。

第4章では、後期ヴィクトリア朝のゴシック小説*Dracula*と帝国ロマンス小説*She*が取り上げられ、ここには「個と個を区別していた境界」が消滅したことによる脅威が想定されているのだという。ヴィクトリア朝小説では個のエネルギーが制御され別の方向に導かれるのだとすれば、これらゴシック小説は、「このような欲望が循環して、結局は人類のすべてを包含する

思慮に欠けた集団を形成する増大装置の場に他ならなくなる、もうひとつの可能性を探っている」(105)のだという。そしてArmstrongはさらにこれを、生物はすべて単一細胞から発達するという一元発生説から、多原発生説をめぐる議論へと繋いでいき、「多原発生的な」*Dracula*における吸血鬼の精神は、個の身体という枠も、ジェンダー、階級、国家、人種といったカテゴリーも越えて移動しうるため、吸血鬼退治者は、捕獲物である吸血鬼のように思考しなければならないという。こうして、男性の吸血鬼退治集団内でのヒロインMinaは、「男性の頭脳」と「女性の心」を持ち、人種や階級の観点からもハイブリッドな存在となるため、彼女の「再生産」は従来のような単なる「反復」であることをやめ、民主主義的個人主義について再考する道を開いてくれるのだという。精密な読み裏打ちされたこうしたダイナミックな論の展開こそ、Armstrongの真骨頂だといえよう。

最終章では、第4章の議論を受けて、個人主義を最大限まで拡大する可能性を求めながら、一方でその可能性を抑制しようとするという、フェミニズムとヴィクトリア朝小説がともに抱える矛盾を指摘し、それを乗り越える方策として、ゴシック小説やロマンスの復権を唱えている。*Jane Eyre*に顕著のように、ヴィクトリア朝小説では核家族の異性愛結婚が標準化され、それを脅かすものは「退化」として位置づけられてきた。しかしながら「多原発生的な想像力」の産物である*Dracula*が提示する、ハイブリッドな反核家族的要素こそが、結婚制度が孕む「不気味なもの」を炙り出すのだとして、新たな主体を探る可能性をゴシック小説に託そうとする。しかしながら、この議論が本書で存分に尽くされているとはいいがたく、これがどう展開していくのかについては、今後に帰したい。

ブラウン大学の英文学・比較文学教授であるArmstrongはこれまで、第1作目の*Desire and Domestic Fiction* (1987)にみられるような、大胆で独自の議論をフェミニストの立場から展開してきた。その特性は本書でも、遺憾なく発揮されている。主体との関係において、あくまでリアリズム小説を主眼に置くWattに対して、ゴシック小説やロマンスの中にこれからの可能性を託そうするArmstrongの提言は、なかなか魅力的でもある。ただ難をいえば、ここで扱われているのが、正典とみなされてきた小説に限られていることである。そのために、たとえばヴィクトリア朝の核家族制度の欺瞞

性を露呈し、男性たちをも変容させずにはいない革新的なヒロインを描いたOlive ShreinerやSarah Grand、Thomas Hardyの後期の小説など、多くのいわゆる「新しい女」小説をここに導入することによっても、同様の議論が成り立ちうるのではないかとの疑問を抱いた。抑圧を語るArmstrongが、正典から除外されてきた小説群に強いている抑圧に思いを致してしまった。しかしながら、たとえそうであっても本書が、コンパクトでありながら、思考のストレッチを強く促してくれる啓発的な良書であることは、間違のないところだろう。

書評

小関隆『プリムローズ・リーグの時代
—世紀転換期イギリスの保守主義』

(岩波書店、2007年)

川端 康雄

プリムローズ（桜草）といえば、イギリスの春を代表する野花のひとつで、淡緑黄色の可憐な五弁花は古来多くの英詩人に詠まれてきた。イギリスの祭事カレンダーにはその花の名を冠した「プリムローズ・デイ」というのがあって、これはベンジャミン・ディズレイリ（1804-81年）の命日に当たる4月19日にロンドンのディズレイリ像やヒュンデン教区教会の彼の墓にプリムローズの花輪を供える国民的慣習であった。過去の偉大な政治家を追悼・顕彰する「桜草の日」というわけで、この「ヤワ」な名称からして、とりたてて強い政治イデオロギーを含む行事とは見えないのだが、この記念日は自然発生的なものではなく、この保守政治家の衣鉢を継ごうとして結成された政治団体の周到な演出によるものだった。その団体の名は（これまた「ヤワ」な）「プリムローズ・リーグ」（強いて訳せば「桜草連盟」となるか）。1883年に結成されたこの政治団体が世紀転換期という「保守党の黄金時代」を民間レヴェルで支える重要な役割を担ったこと——それを本書は明らかにしている。

「保守党の黄金時代」とは1886～1905年の20年間を指す。この期間は1892～95年に第四次グラッドストーン内閣が挟まるのを例外として実質的な保守党政権が続いた。1884年に第二次グラッドストーン内閣の下で第三次選挙法改正案が可決された時点で、そのような「黄金時代」の到来は大方にとって予想外のことであったろう。この選挙法改正によって、イングランドとウェールズで成人男性の約三分の二に有権者資格が与えられるなど、史上初めて労働者が有権者の過半数を占めることとなった。この改正は自由党に益するものだと見る予想は、新たな有権者となる労働者階級が存在

が（彼らと対極の利害関係を持つと思われた）保守党に不利に働くはずだという論拠に立つものだったが、それは思い違いであったことが判明する。労働者の少なからぬ部分が保守党に票を投じたからである。保守党の政策を相対的に好ましいとみなす「ポピュラー・コンサヴァティズム」の潮流がここに生じたのであり、それが世紀転換期の保守党の繁栄を支えることとなった。そしてその政治イデオロギーを導く一種のソフトなプロパガンダを担ったのがプリムローズ・リーグであった。

第1章「ディズレイリの記憶」では、プリムローズ・デイという記念日の創出とその反復を通してディズレイリが「ナショナル・ヒーロー」として祭り上げられていったいきさつが詳述される。ディズレイリとプリムローズの結びつきは、ヴィクトリア女王が病床のディズレイリを見舞った際にこの花を贈ったことと、彼の葬儀にもその花輪を贈ったことに端を発し、2年後の1983年の命日に行われたディズレイリ像の除幕式で「自然発生」の装いをもってこの花が大々的に使われて、「創られた伝統」が確立する。これに乗じて同年に結成されたプリムローズ・リーグは、プリムローズをあしらったバッジやブローチなどの「表象戦略」を用いて、ディズレイリという「ナショナル・ヒーロー」の領有を図り、組織を拡大してゆく（第2章）。著者の以前の仕事には共編著『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』（柏書房、1999年）があり、「歴史と記憶」という近年の歴史研究の重要な問題関心のひとつにいち早く取り組んでいたが、ディズレイリのコメモレイション、その「構成態」としての記憶の表象を読み解くのに、前作での経験がうまく生かされている。

プリムローズ・リーグが用いた手法として、著者は「欲望の肯定」、「悪漢の設定」、「女性層の開拓」の3点に注目し、それぞれ1章ずつを割いて考察している（第3～5章）。最初の点についてまず見ると、選挙制度改革によって急増した有権者、とくに労働者層の支持を獲得するために、社交・娯楽の諸々のイベントを利用した「快楽の政治（politics of pleasure）」の実践によって民衆の日常生活に浸透するやり方をリーグはとった。「労働者が日常的に抱えている快楽への欲望を受けとめ、肯定し、着実にかなえてゆくこと……本来漠然としている労働者の欲望をある特定のかたちに成型してゆくこと……ここに政治の大切な役割があり、それはいずれコンサヴァティズムへの支持に結びつくという見通しをもって、リーグは積極的に『快楽の政治』を展開した」（155-156頁）。政治団体への動員のために社

交・娯楽を利用するのはリーグが初めてではなかったが、従来の手法はいわば高みに立つ啓蒙的な発想であり、「それは労働者の快楽への欲望を積極的に肯定するリーグの『快楽の政治』とは異質だった」(156頁)。

「快楽の政治」との関連で付言するならば、「プリムローズ」と聞いて、英語圏の多くの人はシェイクスピアの“primrose path”(桜草の小道)というフレーズを想起するのではないだろうか。『ハムレット』のなかで留学に旅立つレアティーズが妹オフィーリアに説教を垂れると、それに対してオフィーリアが、「(放蕩者のように) 歓楽という桜草の小道 (the primrose path of dalliance) に踏み入って、ご自身の教えを忘れてたりしませんように」と切り返すくだりが出所で、そこから「享樂的生活」を意味する句として流布した。桜草が目立たぬ場所につつましく咲くことから、「隠れた逸樂の道」という比喩が生じたわけであろうが、プリムローズ・リーグの名称にはこれをふまえて(「転落」のネガティブな要素を抜いて)「逸樂」の意味合いが微妙に込められていると読めないこともない。この「ヤワ」な団体名に「快楽の肯定」の身ぶりが表象されているというわけだ。

リーグに関わる2つ目の論点「悪漢の設定」は、アイルランド自治反対論を訴える際に、グラッドストーンら自由党の自治推進派あるいはパーネル派を、イギリスに敵対する「悪漢」あるいは「変節漢」として描き出して、善悪の二項対立の図式を作り、「悪漢」を叩くことで「善なる集団」(保守派・ユニオニスト)の結束を固める(そして拡大する)手法である。「悪漢」を叩く快感を伴う点では、これも「快楽の政治」につながる。「リーグの場で繰り返された自治反対論は、きわめて容易に攻撃できる『悪漢』を設定することによって、誰もが抱え込み、同時に通常はなんとか抑制している差別的な優越意識を安心感とともに解放させる機能を果たしていたのである」(224-225頁)。それから一世紀余をへて、現代の国際政治において「テロへの戦い」、「ならず者国家」、「悪の枢軸」といったフレーズを聞かされている私たちも、「政治的想像力を勧善懲悪の型に整序するメロドラマ」(223頁)に招かれていることに思い至る。

3つ目の論点「女性層の開拓」は、女性という(政治的な意味での)「未開拓領域」にリーグが目をつけて、その支持を得るべく組織していった手法である。女性を政治の世界とは無縁の「家庭の天使」とみなす家父長制イデオロギーは保守党になじみ深いものだというイメージをもつのは私一人ではないだろう。じっさい、現在に至るまで、労働党などと比べて、保

守党の政策は女性の社会進出には消極的だった。それにもかかわらず、逆説的にも、リーグは女性に政治活動の機会を積極的に提供した。1885年の総選挙ではリーグの女性メンバーが各地で選挙運動に参加し、「プリムローズ・デイル」なる語が人口に膾炙する(238頁)。イギリスでは1818年に女性が選挙権を獲得して以降、60年にわたって男性よりも女性の方が保守党への投票率が高かった。なぜ多くの女性が保守党を支持してきたか。その答えは世紀転換期にリーグがおこなった「未開拓領域」の組織・動員の成功にあると著者は示唆する。「女性の投票行動が保守党を利してきたのだとすれば、その一つの理由は、コンサヴァティズムの想定する『女らしさ』の尊重と女性の政治参加とが並存してきた歴史的経緯ゆえ、保守党が女性有権者へのアピールにおいて優位に立てたことの中にある」(268頁)。

本書はディズレイリ没後のコメモレイションの過程とプリムローズ・デイルの成立、そしてプリムローズ・リーグの政治活動の実態を社会史・文化史の手法を使って考察した試みとして、先駆的かつ画期的な書物である。イギリス史研究において、「コンサヴァティズムに関する研究蓄積が総じて乏しい」(344)という現状に照らしてみても、本書が出た意義は大きい。こうした研究を世に問う場合に、それがそもそも現代の私たちにとってどのような意味をもつのか、という問いがなされるのは当然であろう。歴史研究を現代政治と直結させて安直な打開策を見出そうとする意図を有さないと著者は断りつつも(そして本書の記述は、リーグが駆使した露骨なポピュリスト的手法に憤るというのでもなく、淡々と、しばしばユーモラスな筆致で書かれているのだが)、そうしたアクチュアルな問題意識が根底にある。「日本ではポピュリズムと結びついたコンサヴァティズムが猛威を振るい、アメリカのいわゆるネオコンが台頭し、イギリスのニュー・レイバーがサッチャリズムとの連続性を改めて露呈する、そんな時期に本書は準備された」(344頁)と著者は「あとがき」に記している。

プリムローズ・リーグの時代から一世紀以上を経て、テクノロジーとマスメディアの飛躍的な発展にもかかわらず、ポピュラー・コンサヴァティズムを補強する仕掛け、民衆への心理的な働きかけの基本的なテクニックはリーグが導入したものと同質ではないかと本書を読みながら評者は感じた。その意味でも、ポピュラー・コンサヴァティズムが「猛威を振る」っている現状を考える上で、その成立の原点ともいえるプリムローズ・リーグの時代を扱った本書は、格好の手がかりを与えてくれると思われる。

書評

川本静子／松村昌家編著
『ヴィクトリア女王—ジェンダー・王権・表象—』

(ミネルヴァ書房、2006年)

山岸 裕子

本書は、歴史・文学・美術・文化などの各分野で活躍する6人の研究者が、「ヴィクトリア時代の王権と王のジェンダーとの関わり」を、多彩な観点から考察した論文集である。2004年、第4回ヴィクトリア朝文化研究会において「ヴィクトリア女王—ジェンダー・王権・表象—」をテーマにシンポジウムが開催され、松村昌家氏・谷田博幸氏・井野瀬久美恵氏・川本静子氏の4人のパネリストが、それぞれの角度からヴィクトリア時代のモナキーへのアプローチを行った。この4人に、新たに村岡健次氏と度会好一氏の2人の研究者を加えて、より深みをもった論考となって出版されたのが本書である。

イギリス史において、「ヴィクトリア朝（時代）」は、社会・経済・外交政策など諸領域において著しい発展をみた時代であり、様々な視点から多くの研究がなされている。1つの時代に名を冠した女王「ヴィクトリア」は、今なお、州や町、街路や建物などイギリスとかつて「大英帝国」と言われていた地域の至るところにその名を残し、様々な研究分野でその名を目にするが、女王そのものを取り上げた研究は驚くほど少ない。本書のテーマともなっている「ヴィクトリア時代の王権をジェンダーの面から考察する試み」は、1990年、ドロシー・トムプソンが言及したことから重要視されるようになった。トムプソンは、歴史家の視点から女王の文化的重要性を広範に探究したが、女性君主という視点からの探究の可能性やジェンダー的な問題点を提示したのみである。その後、主に絵画や写真など図像資料の分析からこれらの問題に取り組んでいるのが、エイドリアン・ミュ

ニックやマーガレット・ホームズらである。わが国においても、ヴィクトリア女王に関する考察や言及は様々な機会に見受けられるが、女王自身を多角的に取り上げ1冊にまとめた研究書は本書が初めてである。まさに「『ヴィクトリア女王学』の第一歩」(p.vii)と言えよう。

最初に、本書の構成とテーマについて簡単に紹介しておこう。

「はしがき」(川本氏)は、本書の試みや出版の経緯について述べ、「王を『見られる存在』たらしめる有効な手段は『表象』であり、「『視覚的表象』および『言語的表象』を通じて女王の王権にアプローチ」する、すなわち「ヴィクトリア時代の王権を考察するにあたって『表象』という視点を導入した」という。続いて、第1章「女性君主とドメスティック・イデオロギー」(川本氏)は、当時の女性向け『手引き書』を分析し、女性君主の存在とドメスティック・イデオロギーとの整合性を検討している。第2章「笑わない女王 ヴィクトリア—『王室肖像画像』再考—」(谷田氏)は、王室肖像画を用いて、「幸福な女王一家」と言われる王室像に見える女王自身の視点と意図を探っている。第3章「アルバート公—ヴィクトリアン・ポピュラー・モナキーの成り立ち」(松村氏)は、女王の夫君アルバート公が、ポピュラー・モナキーの成り立ちに果たした役割とその影響を論じ、第4章「ヴィクトリア女王とディズレーリ」(村岡氏)は、ヴィクトリアに最も愛された首相ディズレーリと女王との関係、その関係が築かれた時期のもつ歴史上の意義について検討している。第5章「女王と外国人とユダヤ人」(度会氏)は、イギリスにおける外国人やユダヤ人の立場と女王の関わりから、女王自身の立憲君主としてのあり方や国王大権についての考えなどを論じている。第6章「女王は『帝国の母』だったのか?—サラ・フォープズ・ボネッタの物語を中心に—」(井野瀬氏)は、「人種的に寛大」な慈悲深き「帝国の母」という女王のイメージを、黒人少女サラとの関係から再考している。

以上のように、本書のアプローチは実に多角的で、美術作品から女王の表象を考察したミュージックやホームズらの論証をより深く掘り下げている。紙面の関係上、論点の全てには言及できないので、以下では、評者が特に興味を感じ、印象深かった点を中心に述べてみたい。

まず言えることは、妻・母・君主であった女王の表象には、複数のイメ

ージ、時には相反するイメージが絡み合っているということである。本書は多様な資料を用いて、ジェンダーに影響されるこれらの表象が王権とどう関わっているのかという点に迫っている。

たとえば、19世紀イギリス社会では、男は公領域に女は私的領域にそれぞれの活動の場を得るのが男女本来の資質に適っていると考えられていたため、公領域の頂点に女性が位置することは明らかな矛盾であった。しかし、川本氏（第1章）は、当時人気であった『手引き書』の分析から、「王位にあるヴィクトリアの存在はドメスティック・イデオロギーによって支えられ、同時にドメスティック・イデオロギーを強化している」（p.16）という。その一方で、女王を「女性が男性領域の仕事を立派に遂行していることのシンボル」（p.40）と捉える見方もあった。ドメスティック・イデオロギーを信奉していた女王自身の思惑とは異なり、女王は「目覚めた女性たち」のモデルともなっていたのである。谷田氏（第2章）は、家庭的な美德や家族愛のメッセージが込められているように見える王室肖像画だが、女王自身は王室の正統性や君主としての威厳を発信しようとしていたという。ところが、国民は女性君主に男性君主の強権性を望まず、安心できる家庭的なイメージを求めた。女王が発信し続けた自己イメージは結局埋没してしまったが、家庭的な美德を用いた表象は女王の意に反する形で進行し、「それ故にかえって王室の安泰が図られた」（p.97）という。井野瀬氏（第6章）は、「人種的に寛大」という女王イメージとは異なるもう一つのイメージを読み取ろうとしている。黒人少女サラは、奴隷貿易の犠牲者という立場から「救出」され、女王の後ろ盾を得てイギリスで教育を受け、「文明化の成功例」であるアフリカ人男性と結婚をする。サラの物語から見える女王イメージは、表面的には「人種的に寛大」・「慈悲深き母」のイメージ通りに見える。しかし、この結婚はサラの気持ちに反して強要されたものであり、女王の「同じ人種同士の結婚が望ましい」という考えによる。ここに、そのイメージに反する強権的な母のイメージを見て取ることができる（p.323）。

このように、女王のイメージは多様であり時には矛盾する面も内包しているが、重要なことは、この多様性が結果的に王室や国王を否定する方向ではなく、国民的人気を得る方向に作用したことである。各論考が指摘し

ているように、「時の君主が女性であったこと」がプラスに働いたのである。

ところで、こうした女性君主とそのイメージの影には、夫君アルバート公やディズレーリに代表される政治家たちの存在があった。こうした観点から、2人について詳述しているのが松村氏と村岡氏である。アルバートは、女王の夫であるにも関わらず影の薄い人物であり、ことあるごとに「外国人」・「ドイツ人」と批判された。しかし、松村氏（第3章）は、アルバート公の公私にわたる取り組みや政治的信条を考察し、彼の考えや働きかけにより立憲君主政体の安定が図られたことを指摘する。第1章・第2章で論じられた女王のイメージ戦略は、アルバート公の考えやその影響でもあったのだ。また、ディズレーリが展開した帝国主義政策、とりわけヴィクトリアをインド女帝に推戴したことは、その後の2つのジュビリーにおいて女王が世界帝国の君主として君臨する基礎を築いた。村岡氏（第4章）は、両者の親密な関係が築かれた要因を、父親のいない女王には父性依存の傾向が、またディズレーリには「女性を崇め空想の中に生の喜びを見いだす」志向があり女王に騎士道的な態度で接したと、心理的な性向から分析している（p.200）。さらに、大衆民主主義への傾斜と自由主義から帝国主義へという政治状況の転換において、両者に政治的価値観の一致が見られたという。両氏の指摘に関連して興味深い点は、女王に深く関わったこの2人が外国人とユダヤ人だったことである。そうした点で、「外国人とユダヤ人」と女王の関わりを考察し、その時代を素描した度会氏（第5章）の論考は示唆に富んでいる。

最後に、本書の成果をふまえて、さらなるアプローチの可能性について述べてみたい。第2章でも言及されているように、この時代はジャーナリズムの時代でもあった。イメージの作り手でもあり受け手でもあったジャーナリズムは女王や王室（王権・君主制）をどのように表象していたのか。本書では資料（あるいは史料）としてほとんど用いられていないが、「王室を存続の危機から救ったのが国民」（p.97）とすれば、国民に影響を及ぼしたであろうジャーナリズムの動きやそこでの表象とその変化を捉えることが、課題となるだろう。また、「慈悲深き母」・「帝国の母」という表象は、女王自身の考えによるものだったのか、それとも政治家のアプローチだっ

たのか。その時々の政治家たちは、「女性」君主としてのヴィクトリアをどのように捉え表象しようとしたのか。このように、さらに様々な角度から、ヴィクトリア女王の表象に迫ることができよう。

ともあれ、深い学識をもった研究者による、歴史・文学・美術・文化などからの多面的な論考は、個別の分野からだけでは見えてこない立体的な姿を捉える機会を提供している。本書は、イギリス社会や君主制を考える上で、実に多くの示唆を与えてくれる一冊である。

書 評

アンガス・ブキャナン 『イザムバード・キングダム・ブルネルの生涯と時代』

(大川時夫訳、佐藤健吉監修、LLP技術史出版会、2006年)

重富 公生

「チャーチルの次に偉大な人」—2007年4月10日付『朝日新聞』朝刊のコラム「窓」には、このようなタイトルが付されている。2002年にBBCテレビが行なった「偉大な英国人」の投票で、1位チャーチルに次いでI.K.ブルネルが2位となったという。ブルネルと同業者であり日本でははるかに知名度が高いスティーヴンソン親子は言うに及ばず、シェークスピアやニュートンをさしおいての快挙は、論説子も指摘しているようにやや意外の感にうたれる。

イザムバード・キングダム・ブルネル。もちろんヴィクトリア朝イギリスに少しでも関心があるならば知らぬ者としてない名前である。傑出したエンジニアとして、生涯にイギリスや諸外国で25の鉄道建設を指導し、5つの吊り橋を含む130の橋梁を設計し、独自の流体力学理論をもとにグレート・ブリテン号をはじめとする三隻の巨大大洋航海蒸気船を設計した。また港湾施設や鉄道駅舎の建設、さらにはクリミア戦争の野戦病院の設計にも携わり、ヴィクトリア朝のインフラ整備に計り知れないほどの大きな役割を果たした。その一方で、スティーヴンソンとの鉄道ゲージの統一をめぐる争いに敗れたこと、数々の難工事で少なからぬ数の犠牲者を出したこと、畢生の大事業グレート・イースタン号の建設中にその心労で斃れ、死後完成した同船は商業的には完全な失敗に終わったこと、そして同じエンジニアであった父マーク・イザムバードがサーの爵位を受けたのにたいして、「無冠」で終わったことなどがブルネルの生涯に一種の陰影を与え、それがいくぶんか「判官最良」の情をくすぐるようなことも考えられないで

はない。

2006年はブルネルの生誕200周年にあたり、日本でもさまざまな記念行事が催され、二つの著作が出版された。ひとつは佐藤健吉『ブルネルの偉大なる挑戦』（日刊工業新聞社、2006年）であり、もうひとつがここで取り上げる訳書である。ちなみに佐藤氏の著作はブルネルの業績について、その今日的意義にも言及しながら簡潔にまとめたものであり、ブルネル入門書として奨められよう。本訳書の原書は Buchanan, A., *Brunel: The Life and Times of Isambard Kingdom Brunel* (London: Hambledon Continuum, 2001) であり、ブルネルの生涯とその時代についていっそう掘り下げて論じた興味深い内容の本である。

本書の「序論」によれば、ブルネルに関する先行研究と比較して、本書の視角や方法の特色はほぼつぎの3点にある。第一に、ブルネルのポートレイトをヴィクトリア朝イギリスという大きな時代背景のなかで描き、この人物についての可能なかぎり“well-rounded”な説明を試みていること。第二に、徹底的に原資料を探索し（利用可能な資料のリストは残念ながら訳書では削除されている）、そこからえられた情報を正確かつ客観的に整理・分析したこと。著者の表現を借りれば、これまでの大方の研究は“scholarly presentation”とは言えなかった（原著p.XVIII）。第三に、彼の英雄的活動分野であった鉄道、船舶、橋梁などについては比較的軽めに扱い、一方で従来それほど注目されてこなかったいくつかの側面を掘り下げて論じたこと。すなわちエンジニアとしての訓練や教育、ブリストルでの仕事や人間関係、海外とのつながり、比較的小規模の業績、そして失敗や災厄といった面である。章構成は、ブルネルの生涯と仕事を編年的にたどる形態をとっておらず、章別に違った側面からそれを観察するという形になっている。上記の主旨からとくに内容的に興味深いのは終わりの四つの章（訳書の表現を借りれば「第十章 職業専門家の出現」「第十一章 政治と社会」「第十二章 ヴィクトリア時代の家庭人」「第十三章 英国産業活動の英雄時代」）であろう。

当時の「エンジニアengineer」の役割や訳語については訳書あとがきの「訳者補遺」（322-324頁）が参考になるが（ただしengineerの訳語に「技師」ではなく「技術職人」をあてているのはそれなりに納得がいくにしても、

engineeringを「産業活動」と訳すのは広義にすぎると考えられ、事実多くの箇所で小さからぬ意味のずれが生じているが、翻訳については後述する）、18世紀まではengineerという言葉は主として軍事面での利用にかぎられていた。当時の蒸気機関の製作や運河の開削、架橋といった仕事は専門的訓練を受けた今日的意味でのエンジニアによって担われたのではなく、現場のアマチュア的背景からしだいにそのような役割を兼ねる者があらわれるようになった。たとえばニューコメンやウォット、トレビシック、モーズレーはみな機械工のキャリアからエンジニアとなっていくたのである（E. Corlett, *The Iron Ship: The History and Significance of Brunel's Great Britain* (Wiltshire: Moonraker Press, 1975), pp.6-7)。ブルネル親子が活躍した19世紀前半は職業的エンジニアが排出し、この言葉が今日的意味で使われるようになった時代であり、その代表がブルネルであった。「第二章 徒弟制度の中で」においてブルネルが受けた私的・公的な教育訓練と現場での研鑽のようすが描かれたあと、第十章では彼の同業者や弟子たちとの関係が取り上げられている。とくに「ブルネル学校」とでも表現したくなるような弟子の育成の現場が、彼の「教育」方針や弟子たちへの評価を中心に多くの書簡類を用いて活写されており、当時の専門職養成の鮮やかな一齣となっている。

つづく二つの章は内容的に表裏の関係をなしている。「第十一章 政治と社会」ではブルネルの国政との関わり、都市行政や職業専門団体等の組織における彼の活動が描かれる。彼はヴィクトリア朝の専門職従事者・中流階級としての社会的矜持と経済自由主義的立場を基盤としながらも、都市改良活動に参与し急進主義的国会議員の選挙を応援していた。その一方で労働者の雇用条件の改善などには積極的ではなく、労働者からの評判も芳しいものではなかった。ここで著者はブルネルの政治的・社会的立場の多面性ないし「揺れ」の背景を、彼の個人的資質にまで立ち入って丹念に説明している。そして「第十二章 ヴィクトリア時代の家庭人」では、ブルネルの恋愛と結婚、姻戚関係の形成と展開、ヴィクトリア朝の家庭における家長としての彼の役割、そしてごく近い友人・知人たちとの交誼のありさまが生き生きと描かれている。最後の「第十三章 英国産業活動の英雄時代」（上記のように、engineeringを「産業活動」と訳してある）は、結

論にあたる内容も兼ねた章である。ヴィクトリア朝の文学、芸術、宗教、科学等にブルネルがどのような態度と距離感で関わっており、それらの分野の著名人や諸協会との交流が彼の活動になにを刻印していったかが示される。そして代表的な先行研究であったロルトの著作が、ブルネルをルネッサンス型万能の天才の系譜を継ぐ最後の末裔と断じたのにたいして (L.T.C.Rolt, *Isambard Kingdom Burnel* (1957; paperback ed., London: Penguin Books, 1989), pp.414-415)、あくまでもイギリスにおける英雄的エンジニア時代、初期ヴィクトリア朝の「時代の児」であったと述べて結びとしている。

すべての章の内容の要約紹介は省くが、大小数々の失敗とそれをめぐるエピソードを叙述する第七章や、鉄道・造船等の巨大な事業以外の小規模ではあるが重要な仕事や活動に注目した第九章など、他の諸章もそれぞれ興味深い内容である。彼が関与したいくつかの大事業（たとえば1851年のロンドン万国博）については複数の章で別の形で論じられることになるが、それは上記のような章構成の性質上やむをえまい。総じて本書は著者の意図通り、ヴィクトリア朝人ブルネルをあたうかぎり多面的に考察し、事実語る客観性・説得性と生き生きとした描写を両立させた優れた研究と判断しうる。

残念なのは、原書はともかくとして、本訳書が万人に奨められる本には仕上がっていないことである。評者にとって翻訳書を書評で取り上げるのは初めてのことなので、「評」のうちどれほど翻訳自体について言及すべきなのかわからない。ひとことで言えば本書の日本語訳は全編にわたり読者に忍耐と苦痛を強いる表現となっている。たんに直訳的で生硬な表現ということではなく、原文の各文節の意味を汲み取ったあと日本語の一つの文として自然な表現とまとまりをあたえる作業が放棄されている。辛抱強い読者であれば、しばらく読むうちにこの日本語の文から原文の表現を「推測」してそれを自分流に再解釈するコツをつかむことができようが、潔癖な読者であれば、たとえば「エドムンド・ブルークの著書『フランス革命の反射』」(20頁)という表現に行き当たったあたりで通読を断念してしまうことであろう。本書には訳者の他に監修者もたてられており、訳文について複数回のチェックがおこなわれたはずであるが、遺憾と言わざるを

えない。形式的にも問題なしとしない。原書のパラグラフを頻繁に変更しているのは、読みやすさを配慮してのことかもしれない（それでも原文の一つの文を途中で区切って新しい段落を開始するのは疑問）。しかし原書の脚注をいっさい省略していることは、たとえ「読者の読みやすさを考慮」(322頁)してのことであっても、本書の性格を考えれば不備といわざるをえない。原書にある索引も備えられず、文献目録も大幅に削除されている。

本書はブルネルについての優れた研究書である。そして内容に興味を持たれた読者はぜひ原書を読まれることを推奨したい。

書評

平川祐弘

『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』』

(名古屋大学出版会、2006年)

荻野 昌利

題名の「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」という格言は、英語の“*Heaven helps those who help themselves*”に由来するものであることを知る人は多い。しかし、副題にある中村正直（1832 - 91）と『西国立志編』について知る人は、今日どれだけのいるだろうか。

本書は、この今日ほとんど忘れられたてしまった作家とその作品に新たな角度からスポットを当て、改めてその存在価値を世に問おうとする、極めて斬新かつ野心的な仕事である。著者の平川さんは、言わずと知れた日本における比較文化（*intercultural relations*）研究の最高権威者の一人である。その斯界の権威が長年にわたって精査し、積み上げてきた知識と資料の限りを尽くして、『西国立志編』という「日本で英語の書物が一冊まるごと訳された初めて」の、「日本思想史上きわめて重要な文献」（「はしがき」）を詳しく読み解き、その文化史的意義を自信をもって世に問うたのであるから、（酒に比喻するのははなはだ失礼だが）その内容がのど越しのよい吟醸仕立てであることは、当然予想されたことであつた。そして、結論から先に言うと、そのうまみとコクのある味わいは、期待に違わず、最高の杜氏が丹精を込めて仕上げた芳醇な極上酒の趣のあるものとなつた。

『西国立志編』は副題に『原名『自助論』』とあることからうかがえるように、イギリス19世紀の一大ベストセラー、サミュエル・スマイルズの『自助論』*Self-Help*（1859）の完全訳である。原著は本国で19世紀末までに25万部以上売れたというが、中村の翻訳はその比ではない。1870年（明治四年）初版発売以来、「明治末年までに百万部に達した」（1「明治日本を造った一冊の書物」）というから驚きである。そこには自助と勤労の精神

の訓諭とともに、古今の有名・無名300人余の艱難辛苦の末に成功に至った人々の歴史がエピソード風に語り綴られている。文明開化の掛け声に乗せられ、西洋文化の吸収に余念のなかつた当時の散切り頭の面々にとって、原作者をはるかに凌ぐ名文家中村の自由奔放、修辞を尽くした訳文は、そこに盛られた成功者寓話とともに、新時代に生きようとする人々に、まさに天恵の福音のごとく熱狂的に受け取られたのである。平川さんの『明治日本を作りしものはこの書なり』という一冊は、この書物をおいて他にない（「同」）という賛辞もけつして大げさではない。明治においては、中村正直（号敬宇）は福沢諭吉と並べていささかの遜色もない、大啓蒙家の名前だったのである。

前置きはこれくらいにして、以下本書の内容について概略を紹介することにしよう。第一部「洋学に転じた漢学者中村正直」は、幕府公設の学問所昌平黌^{しやうへいこう}きつての秀才中村正直が、いかなる次第で1866年幕府派遣のイギリス留学生の団に加わるようになったか、その経緯と彼の留学中に体験したこと、そして帰国直前の彼とスマイルズの『自助論』との運命の出会いについて語られている。中村はすでに漢学の世界で相当の実績を残していた。また、そのときすでに30の半ば近く、14名の留学生のなかでは飛び抜けて年齢が高く、彼らとは異なる成熟した独自の視座から西洋の開花した文明を見ることができたのである。“*Japan's turn to the West*”は、明治期の日本精神の特徴的傾向を表すものとして、平川さんが好んで用いる言葉である。漢学者としての地位も学問もかなぐり捨て、西洋文明に直接対峙しようとイギリスに渡り、ひたすらJ. S. ミルなど、当地で生の自由民権の思想の摂取に没頭した中村の姿勢は、まさに新しい日本人の西洋志向の気概のほどを示すものであつた。不運にして徳川幕府崩壊のため、留学は当初予定の5年よりはるかに短い1年半で終わってしまったが、その間に「中村は驚くべき発見をした。中村はイギリスへ行くことによって、民主主義の価値に気づいた東アジア最初の人となったからである」（4「慶応二年幕府イギリス留学生」）。そして、1868年帰国の旅に発とうとしていた彼に、イギリスの知人から饞別代わりに贈られたのが *Self-Help* だったということは、中村にとって、そして（条件付ながら）日本にとっても、まことに天の配剤としか言いようのない僥倖であつた。

第二部「『西国立志編』とその余響」は、スマイルズの作品がどのように換骨奪胎され、日本の風土に馴化されていったか、具体的にいくつかの実

例を挙げて文化伝播の足跡を追ったもので、話題性に富み、比較文化研究の面白さを存分に満喫させてくれる部分である。たとえば、原作中の16世紀のフランスの陶工ベルナル・パリシーの陶器製作の苦勞譚が、中村訳の影響を受けて日本の教科書のなかで次第に陶工柿右衛門の柿色釉葉（うぐいす）の発明伝説へと転化してゆく過程や、18世紀イギリスの自動織機発明家ジョン・ヒースコート（John Heathcote）の織機発明の秘話（秘話）が、日本の織機王豊田佐吉の伝記に織り込まれ、いかに彼の成功伝説の形成に貢献したか、そのドラマティックな変貌の経緯については、ここで下手な紹介をするよりも、まずは直接本書に当たって、一読することをお勧めしたい。柿右衛門の釉葉の発見にまつわるエピソード（15「名工柿右衛門」）や、豊田佐吉伝に必ず登場する佐田先生なる人物（20「佐田先生」）のエピソードが、実はいずれも虚構に過ぎず、『西国立志編』中の挿話の焼き直しであることなど、平川さんの発見は、いずれも揺るぎない実証に裏付けられたもので、見事としか言いようがない。

第三部『「セルフ・ヘルプ」から『クオレ』へ』は、*Self-Help*という作品がどのように異国の文化に受容されていったか、日英以外の国の文化を加え総合的に比較検証したもので、著者の標榜する「三点測量」による比較文化研究の真骨頂を発揮したものと言えよう。イタリアにおける*Self-Help*受容の歴史、とりわけその作品とエドモンド・デ・アミーチスの（日本で「母を尋ねて三千里」の原作として知られる）『クオレ』（1886）との関係と、日本における『西国立志編』のそれとが比較されることで、異文化伝播の議論になお一層の奥行きが増し、多国間比較文化研究の戦略的有效性を示すものとなっている。*Self-Help*の中の目立たない「難破」のエピソードが、やがて日本やイタリアなどで「難破」を主題にしたさまざまな物語を生み出し、さらに避難の際の自己犠牲や女性優位の可否を巡っての道德論争の火種となったこと、そしてそのテーマが現代にまで持ち込まれ、話題の映画『タイタニック』にまで延々連なっていることなど、この部分も第二部に劣らず読み応えがある。平川式「三点測量」、いや「多点測量」の成果が存分に発揮された実例である。

第四部「東アジアにおける自由と自主独立思想の運命」は、外来文化の輸入の成否が、実はその土地のさまざまな風土的条件によって大きく左右されることを説いたもの。そもそも中国は最初、スマイルズやミルを同じ中村訳の『自由之理』（1872）を介して、いわば間接輸入の形で知った。漢

文の素養豊かな中村の和漢混交の訳文から、彼らはある程度その内容を咀嚼できたのだという。しかしながら、（清朝末期の中国の知的水準の全体的低さもあずかっていたかもしれないが）そこに盛り込まれた自由民権の思想は外来種のまま、一部の知識階級を除けば、結局中国の地に根付かなかったのである。

このことは、文明開化期の日本が、スマイルズなどの自由独立の精神を包含できる文化的条件を備えていたことを逆説的に証明するものでもあった。平川さんによれば、日本には二宮尊徳の説く勤勞の精神を尊奉する「報徳宗」という土着の道德信仰があった。さらに長い儒教の伝統があった。中村はその伝統の代表的継承者だった。この日本独特の道德観が、スマイルズのピューリタンの勤勞の精神との、著者の言う「接木」を可能にしたのである。スマイルズの説く「勤勉、剛毅、義務、修養などの徳目」は、「『論語』などを通して徳目を学んできた日本人には受けやすかったのであろう。明治日本人の目には、スマイルズというならばヴィクトリア朝の孔子教徒にも似た西哲の一人として尊敬されたに相違ない」（22章『「報徳記」から『自助論』へ』）。

確かに著者の言うとおり、ヴィクトリア朝の市民社会の求める道德と、新たな国づくりにいそむ明治日本の社会の求める道德とが、中村たちの手によって接木され、そこから生まれたでた果実が明治文化であることに多分間違いはないだろうし、異存のありようはずもない。ただ平川さんの言説に重みがあるだけに、読むほどに、このようにして育まれた接木文化の根強さを改めて思い知らされ、私のなかに名状しがたい絶望感が徐々にのついていくのを、正直禁じえないでいたことも事実である。それはなぜか。著者も認めているように、『西国立志編』は言うなれば実学懲憑の書である。その発行の翌々年（明治5年）、福沢諭吉の『学問のすすめ』「初編」が出る。そのなかで福沢は「学問とは、[……] 世上に実のなき文学を言うにあらず。[……] 今かかる実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」と託宣した。この本は明治期だけでも三百万部を優に越える超ベストセラーであり、日本における実学の伝統の礎を築いた、これも「明治日本を造った一冊」である。中村正直と福沢諭吉。この領袖のもと、日本の社会に明治以降営々と築き上げられたこの実学の堅牢な要塞を前に、大正・昭和に台頭した教養主義はもろくも敗退していった。そして21世紀を迎え、実学の勢いは止むどころか、一段と勢力を強め、福沢

の言う「世上に実のなき文学」は今や滅亡寸前の瀬戸際に立たされている。本論とは直接何の関係もないが、この本は、日本の実学の裾野の広がりを知らしめるという意味で、私のようなへそ曲がりの教養主義の残党をして、そんなやりきれない思いに駆り立てる書物でもある。

書 評

久木尚志 『ウェールズ労働史研究：ペンリン争議における階級・共同体・エスニシティ』

(彩流社、2006年)

久保 利永子

連合王国を構成する四ネイションのなかで、ウェールズはもともと地味な存在である。少なくとも、大多数の日本人の意識においてはそうである。同じく「ケルト辺境」として類別されるアイルランドやスコットランドに比べ、ウェールズの歴史や文化の独自性の認知度ははるかに低い。このような「不可視性」の一因は、ウェールズが語られてきた文脈に求められるだろう。ウェールズがその存在感を強く主張したのは19世紀から20世紀の初頭だが、その時代の記述においてすら、ウェールズをイングランドの延長とする前提のもとに、連合王国および帝国への原料や雇用の供給地として評価する文脈が支配的である。このため、ウェールズに対する関心は、国内有数の産炭地帯を有する南部に集中する傾向がきわめて強い。

しかし、『ウェールズ労働史研究』と題する本書がとりあげるのは、これまで日本のイギリス労働史研究が繰り返し注目してきた南部の大規模炭坑や製鉄所ではない。規模や影響力の点ではるかに劣る北西部のペンリン・スレート鉱山なのである。ペンリン鉱山では、世紀転換期に大規模かつ長期にわたる二度の労働争議が発生した。第一次争議(1896-7年)、第二次争議(1900-3年)である。本書はこの二つの争議について多様な視点から緻密な論証を試み、その全体像を再構成するモノグラフである。本書の議論は以下のように展開される。

序章で、著者は、階級、共同体、エスニシティという三つの視座を導入した「ウェールズ労働史」という新しい構想を提示する。19世紀末までの北ウェールズおよびスレート鉱業の概略をまとめた第一章以降の議論は、

内容から三部に分けられる。まず第二、三章はペンリン争議の前史として、鉱山労働者と地主・鉱山主との間の典型的な互恵的協調的労使関係の変容(第二章)、鉱山および共同体の規範やその根底にある価値観(第三章)に注目する。

続く第四、五、六章は、二つの争議が提起する諸問題を扱う。第四章は、イングランド社会との関係が重要な焦点となる。ペンリン争議は、イングランド社会との関わりの中で、どのように表象され、変容していったのか。第五、六章はそれぞれ労使関係行政、治安維持政策という異なる視点から争議を考察する。第一次ペンリン争議は、1896年の調停法成立後に生じた最初の大規模争議であったため、商務省の介入は重要な意味を持つ(第五章)。第六章では第二次ペンリン争議時の三度にわたる軍隊派遣問題が分析対象となる。

第七、八章は、鉱山共同体が争議の進展と共にどのように変貌していったかが解説される。ここで議論の焦点となるのは「暴力」の問題である。第一次争議では鉱山に限定されていた暴力の射程が、第二次争議では地域社会へと拡大していく。暴力の拡大は何を意味しているのか。その本質は何なのか。第七、八章ではこのような問いに対し、答が提示される。

スレート鉱業は、18世紀末から20世紀初頭まで、ウェールズ北西部の二州、カナーヴォンシャーとメリオネスシャーの基幹産業として地域社会の盛衰を左右してきた。1891年時点でこの二州のスレート鉱山では、およそ一万二千人が雇用されていた。20世紀初頭まで世界市場を独占し続けた当該地域のスレート鉱山のなかでも、約3,000人を雇用するカナーヴォンシャーのペンリン鉱山は、メリオネスシャーのディノルウィック鉱山とともに、この産業の中心的存在であった。

ペンリン鉱山の開発は1780年代から一貫してペンリン卿によって行なわれてきた。国教徒で英語単一言語話者であるペンリン卿は、地主・鉱山主として、非国教徒でウェールズ語モノグロットの鉱山労働者との間に互恵的関係を築いている。高度な技能を誇る鉱山労働者は、労働貴族としての強い自負心を持っており、言語に代表されるウェールズ文化は、彼らの鉱山労働者としてのアイデンティティと不可分のものであった。19世紀末までのスレート鉱山は、このような労働者が、鉱山主とのパターンリスティ

ックな関係を背景に、独自の価値観と就労形態に基づく自治を確立した労働の場だったのである。

しかし、1880年代以降の英国経済の相対的衰退の中で、そのような労使関係は変質を余儀なくされる。代替わりしたペンリン卿が雇った、ロンドン出身で英語モノグロットの新しい鉱山管理責任者が、利潤追求を第一とする合理的経営方針の導入を決定する。争議の発生は、このような方針変更の避けがたい帰結であった。新しい経営方針は、それ以前の労使協調路線の根本的変更を迫り、労働者独自の価値観や自治の放棄を要求するものだったからである。鉱山労働者にとって、それは重大な権利侵害であり、到底容認できるものではなかった。

本書は、こうして発生した第一次、第二次ペンリン争議を多様な視点から考察する。その過程において、ペンリン争議の全体像は狭義の労使関係史の文脈では把握しきれないことが明らかとなる。そこには、複数の対立軸、すなわちイングランドーウェールズ、資本家ー労働者、中央ー地方、国教徒ー非国教徒、保守党ー自由党などが存在するが、これらの対立軸は固定的なものとして争議の方向性を規定するものではなく、常に流動的かつ複雑な相関関係をもち、それゆえに争議の進展に伴い、さらなる対立軸の創出をもたらしていった。

この複雑な争議の様相は、階級、共同体、エスニシティという三つの焦点の導入によって初めて解明されうる。このような争議像と分析視点は、同時代を対象とする労働関係史研究の視野をさらに広げるものではないだろうか。また、ここで明らかにされる「北」の姿は、従来の「南」中心のウェールズ像とは異なる「ウェールズ」である。このため、読者に対し、自らの中にあるウェールズ像の再考をせまるものとなるだろう。

労働史研究の文脈における本書の意義は、次の三点を解明したこととされる。第一は、全国化する過程で、元来の争議の論点に変容する問題、第二は、争議への国家介入の問題、第三は争議と治安維持機構との関係、である。この三点に加えて、評者がとくに興味深く感じたのは、争議中の人々の日常生活の問題であった。

第七、八章では、三年におよぶ第二次争議の際に、鉱山労働者の生活の場であるベセスダの町で発生した暴力が議論の中心となる。一時は閉鎖さ

れた鉱山の再開（1901年6月）は、鉱山労働者の中に深刻な分裂をもたらした。スト参加者と離脱者への分裂である。ここでは、この二者およびその家族の間で発生した身体的・精神的暴力の様相と、その背後の人々の意識が考察される。著者は、俯瞰的に分裂の様子を描くのではなく、具体的な事例の積み重ねによって、第二次ペンリン争議が鉱山共同体に生きる人々に与えたダメージの深刻さを浮き彫りにする。特筆すべきは、議論が「スト破り」側の人々の心の動きにまで踏み込んでいる点だろう。

スト離脱者の暴力は、しばしば飲酒と関連づけて語られた。このような語りは、離脱者のイメージダウンを狙うスト参加者側の戦略という側面を無視することはできない。しかし、著者は、飲酒と暴力の関係について、さらなる解釈を提示する。三年間にわたる壮絶な争議の間、ペンリン鉱山労働者の共同体では、一家の中にスト参加者と離脱者を同時に抱える家族は決して例外的な存在ではなかった。そのような家族の苦悩、いずれの側にも属することができず、いずれの側の理念に頼ることもできない人々の苦悩を視野に入れることで、これまでは見過ごされてきたスト離脱者の暴力と飲酒の結びつきが持つ、もう一つの意味が明らかになる。

評者にとって、「労働史・労使関係史の枠組みをひろげることができるのではないか」（256頁）という著者の意欲がもっとも強く感じられたのは、イングランドの労働運動との提携の中で変容していくペンリン争議の姿と、そこでのエスニシティのゆらぎを論じた第四章、人々の日常生活や意識の有り様にまで踏み込んで、日常の場から争議を描き出す第七、八章であった。ただし、本書に対し、疑問や不足を感じた点がなかったわけではない。それは以下の二点である。

まず、本書では、新聞や北ウェールズ鉱山労働者組合関連史料といったウェールズ語史料が使用される一方で、ウェールズ語による二次文献がまったく言及されていないことが挙げられる。ウェールズ大学を中心に、多岐にわたる研究成果がウェールズ語でも積極的に発表されている現在、本書の議論と関わりをもつウェールズ語文献が不在とは考えにくい。

次に、議論における女性の扱われ方である。スレート鉱山では、女性の雇用は皆無に近かったのは事実である。しかし、鉱山共同体を記述する第三、七、八章においても、女性はほとんど言及されない（第三章）か、受

動的あるいは二次的な存在としてのみ描かれる（第七、八章）。このため、彼女たちの存在感は希薄である。ところが、別の研究者によれば、女性たちは主体的に「暴力行為」に参加していたという。² 「暴力」の定義とともに、この問題はさらに議論の余地があるように思われる。

このような点が指摘可能であるとしても、本書が持つ意義が否定されるわけではない。著者が提起する「ウェールズ運動史」構想の意義には評者もまったく同感であるし、今後の議論の展開を心から楽しみにしている。ウェールズ史や労働史のみならず、社会言語史やエスニシティ、他者認識などに関心をもつ広い分野の読者に、ぜひ読んでほしいと思う。

注

1. 詳しくは松村高夫氏の書評 『歴史学研究』 第824号、2007年2月、54-7頁を参照。
2. たとえば、R. Merfyn Jones, *The North Wales Quarrymen 1874-1922* (Cardiff: University of Wales Press, 1982), p.233, 238 など。